
人生様々、人育て、和

広上 淳一

オーケストラ・アンサンブル金沢 アーティスティック・リーダー

私が初めて鍵盤に触れたのは6歳のころであった。父親の転勤に伴い、松山、川崎、仙台、横浜、茅ヶ崎と地方の都市で少年時代を過ごした。成長期に出会った素晴らしい先生が、私の両親を説得して音楽の道へと導いてくれた。時はまさに高度経済成長期であった。優秀な人間は一流大学を目指し、弱者に思いを寄せる精神などどこかに忘れ去られてしまっていた。古き良き日本人が持っていた心は失われ、人の心の痛みに気づかない、気づけない社会になってしまった。そのような時期に、私は素晴らしいオーケストラの演奏を聴いて深い感動を得る機会に恵まれ、いつの日か音楽家になる希望を持ち続けていた。

時は今、AIの時代である。往年の名指揮者の映像を指揮台に立たせて指揮をさせることすら可能という。IT技術の進歩によって生活がますます便利になる一方で、現実世界では、人が人との争いを恐れてインターネットへ逃げ込んでは、誹謗中傷が飛び交う。国際情勢も危うく、奇妙な忖度文化がはびこり、社会的格差が広がる中で、子どもたちは危険にさらされている。しかしこのような時代にも、金沢をはじめとする地方都市には、人々の心に寄り添える心の優しさがまだ残っているように思う。

昨年の能登半島大震災とその後の水害により、音楽文化活動も停滞を余儀なくされた。理不尽にも一瞬にして失われたかけがえのない命があった。私たち音楽家に何ができるのか、何かしなければ・・・私とオーケストラ・アンサンブル金沢（OEK）の団員の共通の思いだった。そして被災地での演奏活動が始まった。能登の地に降り立った私たちが見たのは、自分自身が大変な困難の中にあるにも関わらず周囲を慮る思いやり、「能登はやさしや土までも」と言われる温かい心であった。そこには都会ではみることのない、人と人の触れ合いを大切にする姿があった。

石川は料理も素晴らしいが、音楽家には洋の東西を問わず料理を得意とする人が多い。音楽と料理とは似たところがあるからだろう。楽譜がレシピだとすれば、指揮者はさながら料理人をまとめるシェフといったところであろうか。音楽家や料理人が作り出したものは、瞬間、人の心を満たし、時間の流れとともに刹那に消化されて消えてしまう。だからこそその瞬間を大切にしたい。OEKの団員と共に人間同士の触れ合いを大切に活動を続け、優しさの精神を広めていきたい。